

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24510381

研究課題名(和文)性別違和に関するケアと支援の現況(アジア)：実態把握と文献・資料のデータベース化

研究課題名(英文)The current state of care and support for Transgender people in Asia

研究代表者

東 優子(Higashi, Yuko)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：60330601

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究開始当初、ジェンダー非同調性をめぐる国際的議論において、日本を含むアジア地域の固有の経験や営み(文化的装置)が反映されることがほとんどなかった。また国内では90年代以降に輸入された精神疾患概念「性同一性障害」に依拠して支援システムが構築されてきた。本研究では、1)1990年から2012年までに国内で発表された1483本の文献資料を収集し、学問領域別に「性同一性障害」の言説の発展と定着の経緯を分析し、2)他のアジア諸国の現況については、国際的組織が主体となって実施したケア・支援システムの現況調査に協力し、冊子資料の策定とその邦訳版制作に関わった。

研究成果の概要(英文)：Much of the recorded experience, knowledge, and lessons learned in the area of Transgender health/rights is derived from North American and Western European sources. This study investigates how Japan became a country where GID (terminology and concepts) is (are) being heavily used both in formal support systems and among transgender people themselves. Data were collected from literature and materials related to this topic that were published in Japan between 1990-2012 (N=1483). We also collaborated with international organisations to create and publish The Asia Pacific Trans Health Blueprint and its Japanese translation version.

研究分野：性科学

キーワード：国際情報交換(アジア) トランスジェンダー 性同一性障害 性別違和

1. 研究開始当初の背景

性同一性障害(以下、GID)は、国内外における治療スキームや法体制など、公的支援のありように正当性を与える重要な根拠となっている。しかし疾患概念は流動的であり、その定義および構造的な位置づけは、時代や文化・社会によって変化してきた。とくに、国際的診断基準(DSM および ICD)の改訂時期にあたり、GIDの名称・概念定義・ICD-11における位置づけをめぐる議論の動向が注目されている。

制度的な流れは以下の通りである。

伝統的な性別概念枠組みに収まりきらない人々のジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー表現・行動については、洋の東西を問わず、古代より文献などにその記述を散見することができる。時代や文化・社会によっては「第nの性」として社会的に位置づける文化装置が存在してきた。状況が大きく変化するのは、近代以降のことである。現行の支援システムの基本的理念とスキームは、欧米の医師を中心とする専門家集団によって1960年代に確立された。その象徴が、1966年にハリー・ベンジャミンが提唱した精神療法・ホルモン療法・手術療法の3連構造であり、それを継承した国際的ガイドラインSOCである。WPATHが策定するSOCは、日本を含む各国のガイドラインの基本となっている。さらに、「性同一性障害特例法」や諸外国の類似した法体制など、公的支援システムと「診断と治療」は分かち難いものになっている。GID(当時は「性転換症」)がDSMやICDに記載されるようになったのは1980年代以降のことである。しかし当初から現在に至るまで、これに反対する声は根強く存在しており、「医学的知識の応用は中立的な営みではなく、政治的な営みである」という、1970年代に始まる近代精神医学への批判を背景に「脱病理化」された同性愛と比較されてきた。現在進行中の改訂作業における主な争点は、1)GIDは精神疾患か、(同性愛と同じく)自然現象としての多様性か、2)GIDを削除しないとして、その名称と構造的な位置づけをどうするか、に大別される。上記で言及した国際的ガイドラインの最新版SOC-7(2011)では、「性別違和症(以下、GD)が疾患概念として成立しうるとしても、それは生涯にわたる状態ではない。伝統的なジェンダー概念に収まりきらない状態(gender non-conformity)自体は病理ではない。」という、学会の統一見解が明記されている。また、従来の3連構造を解体し、精神療法の繰り返し(長期

化)を非倫理的だと断言するなど、ケアに関する新機軸が打ち出されている。DSM-V(2012)ではGIDがGDに改称されることが決定している。しかしICD-11(2015)については、欧州委員会がWHOに対して「精神および行動の障害」から外すよう勧告する決議案を採択(2011年9月)するなど、国際的議論の動向は流動的である。

WPATHは、DSMやICDの改訂に関する国際的議論の動向を左右する影響力をもつ。しかし同専門職集団は、その歴史的経緯からして、欧米の専門家(もっぱら医療関係者や性科学者)が中心となって組織化されてきた。そのため、もっぱら英語を公用語とする議論においては、日本を含む多くの地域は周縁化され、不可視化されてきた。SOC-7に内包された課題のひとつが「グローバルな汎用性・適合性」にあることは、WPATHが明記しているところでもある。

例えば、WPATHが実施した、各国の代表的な関係諸団体(n=201)を対象とする現況・意識調査(英語)の回収率はわずか21%(n=43)であり、その多くは欧米諸国であった。その主な理由は言語的問題であると同時に、欧米を発信源とする最新知見、周辺的情報、あるいは意識の共有が不十分であるという実態も影響している。このことがさらに、将来的にも、非英語圏が国際的議論に主体的にかかわる機会を失い続けるという問題を引き起こす。

本研究が対象とする日本を含むアジア地域は、その歴史における固有の経験や営み(文化的装置)が文化人類学的に注目されてきた。しかし、非典型的なジェンダーをめぐる医学的言説やそれをめぐる国際的議論に反映されることはほとんどない。一方で、国内においても、医療や法律などの公的支援システムは、欧米から輸入された医学的言説に依存してきた。「性同一性障害」という疾患概念は、民間の支援システムや「当事者言説」に至るまで広く定着している。

2. 研究の目的

本研究は、状態としての性別違和や、伝統的なジェンダー概念の枠組みに収まりきらない状態=性別非同調性(Gender Non-conformity)をテーマとする。

(1)固有の経験や営み(文化的装置)をもつアジア諸国におけるケア・支援システムの現況を把握すると同時に、欧米の専門家を中心となって構築された言説(医学的知識の応用)がどのように再生産され、現在のシステムにどのような影響を及ぼしてきたかを考察する。

(2)上記(1)を通じて収集された資料・文献をデータベース化する。

以上によって、これまで不可視化されてきた地域から発信されている情報・研究成果を国際的議論や学術的研究に反映させ、性科学

やセクシュアリティ研究あるいはクィア・スタディーズの進展に寄与したい。

3. 研究の方法

(1) 国内の文献資料については、検索エンジン(医中誌およびCiNii)によって収集し、諸外国の文献資料については研究協力者が主宰するネットワーク組織 Trans-Asia を基盤としてネットワークを構築し、国際学会などを通じて、研究協力者をリクルートした。(2) データベース化については、具体的方法について、すでに英語およびヨーロッパ言語で書かれた性科学研究のデータベース化を進めている性科学に関する国際学会 WAS と協力し、これを進めていく予定である。

4. 研究成果

(1) 収集された国内の文献資料 (N=1,483) を分析したところ、性別違和を主題に扱った文献数は増え続けており、その内容は埼玉医科大学の答申(1996年)と性同一性障害特例法成立(2003年)といった国内の動向を色濃く反映するものであることが明らかになった(図1)。医療・法律・心理・教育など専門領域の別にかかわらず、その80%が「性同一性障害」をキーワードとしており、諸外国でより一般的な「トランスジェンダー」をキーワードとする文献は6%に過ぎない(図2)。

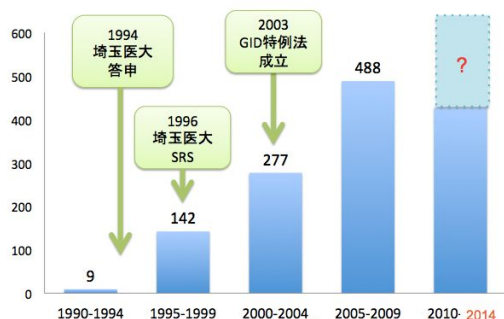


図1 性別違和を主題とする文献資料数の経年的推移 (N=1,483)



図2 性別違和を主題とする文献資料数(分野別)の経年的推移 (N=1,483)

さらに、分野を問わず「支援」は医療モデルに依拠しており、重要な機能としての

Gate Keeping と「性同一性障害の正しい理解」を強調している。こうした文献においては、多角的に検証した痕跡としての、クリティックの欠如を指摘することができる。また、「性同一性障害の正しい理解」が強調されることは、同名称と疾患概念の国内における定着と深化を強化することにつながり、疾患名をトランス当事者・自助支援組織、あるいはLGBTの権利擁護運動に関わるコミュニティが積極的に使用している点は、諸外国にはほとんど見られない、日本固有な状況ということができる。

(2) アジア諸国における文献資料については、ネットワーク構築の過程で、APT (Asia-Pacific Transgender Network) その他の国際的機関が本研究の目的と一致した調査を実施していることが明らかとなり、当初の研究計画を変更し、これに協力した。その成果は、The Asia Pacific Trans Health Blueprint として刊行されており、本研究ではとくに連携協力者をえて、日本語版を完成させた(未発表)。

(3) データベース化については、研究実施期間中に着手することができず、引き続き取り組んでいく予定である。

(4) 本研究の国内外におけるインパクトとしては、上記の The Asia Pacific Trans Health Blueprint の他、国際人権団体 Human Rights Watch が 2015 年に日本国内で調査を実施するにあたり、事前のブリーフィングや国内のキーパーソンの紹介などに協力し、同団体の報告書にも研究協力者として記載されている。また、研究開始当初に着手していた SOC-7 (WPATH, 2011) の邦訳版を完成させた。これは、WPATH の公式ホームページにアップロードされ、広く国内でも閲覧されているほか、日本で唯一の学会組織である GID (性同一性障害) 学会・研究大会でのシンポジウムなどでも議論する際の資料として活用されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

東 優子、LGBT/LGBTI の「性の権利」をめぐる国際社会の動向と日本社会、精神療法、査読無、2016

東 優子、排除と包摂のせめぎあい：LGBT をめぐる近年の動向、アステイオン、査読無、2015、56-67

中嶋 潤、東 優子、小林 りょう子、執行 照子、分科会「性別違和」を理解するために：「女も男もしっかりこない...」当事者の語りから学ぶ(京都大会(2015年)記録)、フェミニストカウンセリング研究、査読無、2015、111-115

〔学会発表〕(計 10 件)

東 優子、性の健康と教育と人権課題—SOGI をめぐる国際社会の動向と日本社会、第 119 回日本小児学会学術集会、2016.5.14、さっぽろ芸術文化の館（北海道札幌市）

東 優子、性別（ジェンダー）承認を巡る国際社会の動向、第 45 回全国性教育研究大会、2015.8.3、くまもと県民交流館（熊本県熊本市）

Higashi, Y. and Wong, J., Asia and the Pacific Trans Health Blueprint, The 22nd Congress of World Association for Sexual Health, 2015.7.26, Suntec Singapore Convention & Exhibition Centre (Singapore)

東 優子、性器中心主義と性別承認、日本国際文化学会第 14 回全国大会、2015.7.4、多摩大学（東京都多摩市）

東 優子、性のあり方を個人差として扱うことの可能性—教育・発達の視点から、日本教育心理学会第 56 回大会、2014.11.7、神戸国際会議場（兵庫県神戸市）

Higashi, Y., Analysis of publications (1990-2013) on Transgender Issues in Japan, 13th Congress of Asia-Oceania Federation of Sexology, 2014.10.23, Brisbane (Australia)

東 優子、日本における性別違和をめぐる言説の動向、第 33 回日本思春期学会総会・学術集会、2014.8.30、つくば国際会議場（茨城県つくば市）

東 優子、トランスジェンダーの健康と権利、第 17 回 GID（性同一性障害）学会、2014.3.21、大阪府立大学（大阪府堺市）

Higashi, Y., A Hidden Traps in the Health-Based Approach to Transgender Phenomenon in Japan, The 21st Congress of World Association for Sexual Health, 2013.9.24, Porto Alegre (Brazil)

Higashi, Y. and Mitsuhashi, J., Database on Transgender Health/Rights in Japan, The 21st Congress of World Association for Sexual Health, 2013.9.23, Porto Alegre (Brazil)

〔図書〕(計 2 件)

東 優子 他、三一書房、にじ色の本棚、2016、207（178-179）

中塚 幹也、東 優子、佐々木 法子（日本語監訳）、WPATH、トランスセクシュアル、トランスジェンダー、ジェンダーに非同調な人々のためのケア基準（WPATH SOC-7）、2014、112（1-112）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東 優子 (HIGASHI, Yuko)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：60330601

(2) 研究分担者

三田 優子 (MITA, Yuko)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：20261208

(3) 連携研究者

石井 由香理 (ISHII, Yukari)
大阪府立大学・人間社会学部・日本学術振興会特別研究員
研究者番号：90788431
(H27 から連携研究者として参画)

齋藤 圭介 (SAITO, Keisuke)
明治大学・研究知財戦略機構・客員研究員
研究者番号：60761559
(H27 から連携研究者として参画)

(4) 研究協力者

元山 琴菜 (MOTOYAMA, Kotona)
大阪経済大学・非常勤講師
(H27 から研究協力者として参画)

宮田りりい (MIYATA, Lily)
KAC(関西エイズ対策協議会)代表
(H27 から研究協力者として参画)